

蜘蛛の糸

芥川龍之介

或日のこととてござります。お釋迦様は極樂の蓮池のふちを、獨りでぶら／＼歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうにまつ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも言へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居りました。

標樂は丁度朝でございました。

やがてお釋迦様はその池の縁にお佇みになつて、水の面を藏つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覽になりました。

この極樂の蓮池の下は、丁度地獄の底に當つてありますから、水晶のやうな水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るやうに、はつきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、健陀多といふ男が一人、外の罪人と一しょに齋いてゐる姿が、お目に止りました。

この健陀多といふ男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろ／＼悪事を働いた大泥坊でござりますが、それでもたつた一つ、善い事をした覚えがございます。と申し

うその蜘蛛を殺さずに助けてやりました。

お釋迦様は地獄の容子を御覽になりましたながら、この健陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひ出しになりました。



ますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。

そこで健陀多は早速足を擧げて、踏殺さうと致しましたが、

「いや、いや、これも小さいながら命のあるものに違ひない。その命を無暗にとるといふ事は、いくら何でも可哀さうだ。」と、かう急に思ひ返してとうと

上に、極樂の蜘蛛が、一匹美しい銀色の糸をかけておりました。

お釋迦様はその蜘蛛の糸をそつとお手にお取りに

なりました。そして、それを、玉のやうな白蓮の間にから、遙か下にある地獄の底へまつすぐにお下しさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一しょに、浮いたり沈んだりしてゐた健陀多でござります。何しろどちらを見てもまつ暗で、たまにそのくら闇からぼんやり浮き上つてゐるものがあると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでござりますから、その心細さと言つたらございません。その上あたりは墓の中のやうにしんと静まり返つてゐて、たまたに聞えるものと言つては、たゞ、罪人がつく微な嘆息ばかりでござります。

これはこゝへ落ちて来る程の人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れはてゝ、泣聲を出す力さへなくなつてゐるのにございました。

ですからさすが大泥坊の健陀多も、やはり血の池

の血に晒びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに唯もがいてばかりをりました。

ところが或時の事でござります。何氣なく健陀多が頭を擧げて、血の池の空を眺めますと、そのひとつずち細く光りながら、するゝと、自分の上へ垂れて参るではございませんか。

健陀多はこれを見ると、思はず手を打つて喜びました。この糸に縋りついて、どこまでものぼつて行けば、きっと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。

いや、うまく行くと、極樂へはひる事さへも出来ませう。さうすれば、もう針の山へ追ひ上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもある筈はございません。

かう思ひましたから健陀多は、早速その蜘蛛の糸を両手でしつかりと摑みながら、一生懸命に上へ上せん。

へとたぐりのぼり始めました。

元より大泥坊のことでございますから、かういふ事には、昔から慣れ切つてゐるのでございます。

しかし地獄と極樂との間は、何萬里となく隔つてゐるのでですから、いくら焦つて見たところで、容易に上へは出られません。稍しばらくのぼる中に、とうとうとう健陀多もくたびれて、もう一たぐりも上方へはのぼれなくなつてしまひました。

そこで仕方がござ

いませんから、先一休み休むもりで、糸の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見下しました。すると一生懸命にのぼつた甲斐があつて、さつきまで自分がぬた血の池は、今ではもう何時の間にか暗の底にかくれて居りました。それからあのほんやり光つてゐた恐い針の山も、足の下になつてしましました。



つて來るではございませんか。

健陀多はこれを見ると、驚いたのと恐いのとで暫くは唯、莫迦のやうに大きな口を開いた儘、眼ばかり動かしてをりました

自分一人でさへ斷れさうな、この細い蜘蛛の糸がどうしてあれだけの人數の重みに堪へる事が出來ま

せう。

もし萬一、途中で斬れたといたしましたら、折角

こへまでのぼつて來た、この肝腎な自分までも、もとの地獄へ逆らとしに落ちてしまはなければなりません。そんなことがあつたら、大變でござります。

が、さういふ中にも、罪人たちは何百となく何千

となく、まつ暗な血の池の底から、うよ／＼と這ひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼつて参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまふのに違ひありません。

そこで健陀多は大きな聲を出して、

「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一體誰に尋いて、のぼつて來た。下りろ。下りろ。」

と喰きました。

その途端でござります。

今まで何ともなかつた蜘蛛の糸が、急に健陀多の

ぶら下つてゐるところから、ぶつりと音を立てゝ断れました。

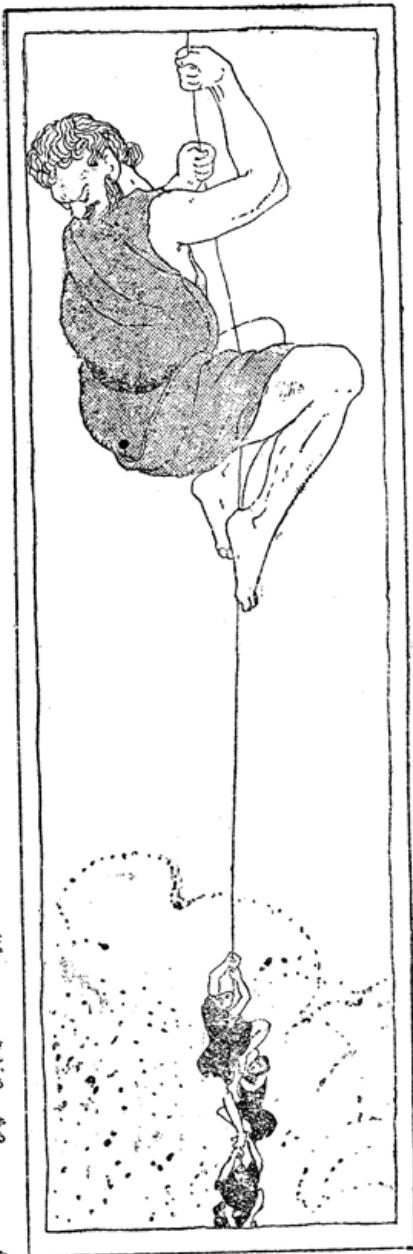
ですから、健陀多もたまりませぬ。あつといふ間もなく、風を切つて、獨樂のやうにくる／＼まはりながら、見る見る中に暗の底へ、まつぶかさまに落ちてしまひました。

後には唯極樂の蜘蛛の糸が、きら／＼と細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れてゐるばかりでござい致す。

三

お釋迦様は極樂の蓮池のふちに立つて、この一部始終をぢつと見ていらつしやいましたが、やがて健陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうな顔をなさりながら、又ぶら／＼歩きになり始めました。

自分でかり地獄からぬけ出さうとする、健陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當な罰をうけて、



もとの地獄へ落ちてしまつたのが、お釋迦さまのあ
目から見ると、淺間しく思ひしめされたのでございま
せう。

しかし極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には顧
着致しません。

その玉のやうな白い花は、お釋迦さまのお足のま
はりに、ゆら／＼夢を動かしてをります。

そのたんびに、まん中にある金色の蕊からは、何とも云へない好い匂が、絶え間なくあたりに溢れ出ます。

極樂ももうお午に近くなりました。